

(表面から続く)

「自分事として何ができるか」

一人ひとりがそれぞれの場所・役割で



アクアポニックスについて説明する杉山さん（うみがたり）

長谷川 私自身参加するのが初めてでしたが、多摩川には金属類のごみやタバコのごみなどたくさんのごみが流れ着いていて驚きました。1時間ほどみんなで協力し、多くのごみを回収することができました。

園内ではコンポストを設置し、動物のフンや食べ残しなどを堆肥にして、野菜を育てる活動をしています。その野菜をまた動物が食べ、堆肥を

販売し、循環型の取り組みを進めています。また、近くのスーパーから廃棄する予定の食品をいただき、動物の餌として利用しています。屠体給餌の取り組みとして、害獣で処分されるイノシシやシカなどの肉を肉食動物の餌として利用しています。

羽村市動物公園の樹木も寿命が近いものが多い、二酸化炭素の吸収量が下がってきていると思うのですが、動物園でできることについて、何か事例やヒントがあれば教えてください。動物園の取り組みと、水族館の取り組みをグループで連携させたら、より面白い活動ができ、大きな効果にもつながるのではないかと思います。

奥津 海に流れ込む川をきれいにすることで、海洋ごみの量を減らしていく。グリーンカーボンとブルーカーボンをセットで考えていくことが大事かもしれませんね。

最後に西武園ゆうえんちの高城さんお願いします。



参加者に語りかける信時さん（右）と奥津さん



真剣に討論する参加者たち

高城 西武園ゆうえんちでは、数多くの昆虫等が生息する自然豊かな場所にあります。ただ、水族館や動物園と違い、海洋生物や動物の飼育業務を事業としていないため、環境への意識が低く、施設と比べてサステナ活動が遅れていると感じています。そこで、私たちが

す。他にも、遊園地の遊具を再利用して新しい遊び場を作ったり、取り壊した観覧車をフォトスポットとして残しています。遊園地ができるサステナビリティ活動について、良いアイデアがあれば教えてほしいです。

信時 伐採でいうと、公園の枯れ木で行うバイオマス発電なんかもありますよ。遊園地は子どもたちが多く訪れる場所でもあるので、教育の側面から、楽しみながらブルーカーボンについて学べる事業を、グループの他施設と連携して考えていくのはどうでしょうか。

楽しみながらCO2削減へ

奥津 西武園ゆうえんちでは昭和の町を再現していますが、昭和の時代にサステナビリティ活動を行うことが、幅広くできると

信時 遊び感覚で体験できるような仕組みを作ること、多くの人を巻き込んだ取り組みができるようになるのではない

か。信時 遊び感覚で体験できるような仕組みを作ること、多くの人を巻き込んだ取り組みができるようになるのではない

かと思っています。CO2のクレジットを小さな単位で売買する仕組みを導入することで、子どもたちでも気軽に環境保護に参加できるようになるかもしれません。例えば100円や1000円といった少額でCO2削減に貢献できるような仕組みです。来園者が自分の行動によってどれだけCO2を削減できたか、ポイントで表示するようなシステムを導入するなど、身近なところから誰でもできることを知ってもらい、活動が良いと思います。

奥津 今日座談会では、各施設で役立つヒントがたくさん見つかったと思います。話を聞いて、改めて感じたのは、自分事として、自ら何ができるのか考えるということの大切さです。各々が自分のできることを考え、そこから一歩ずつ始めていけたらいいと思います。今取り組んでいる活動に続き、今後も新しい取り組みを進めていきましょう。



「うみファーム」では、毎年、ワカメの植え付け・収穫イベントを開催。ワカメの成長の早さに驚き、自らが収穫することで食育にも興味を持つことができ、海の環境を身近に感じながら、ワカメを通じてCO2削減や地球温暖化について学ぶことができます。



河端 勉さん (42)
飼育設備担当として飼育水槽、水槽設備の維持管理を務める。入社24年目。自分にとってサステナとは「地球環境の悪化を少しでも遅らせるために必要なこと」

未来を動かす。みんなで動かす。

ほほえムービング

各施設のサステナ活動紹介



ほほえムービング
についてはこちら



小さな生きものたちの隠れ家や、産卵の場であることから、うみの揺りかごと呼ばれるアマモ場の再生に向けた調査・研究活動を行っています。



安部 奏さん (52)
副館長として飼育管理や飼育育成、生物収集を務める。入社27年目。自分にとってサステナとは「水族館が存続するために必要な要素を含む大事なこと」



新潟県立海洋高等学校と共同してアクアポニックスを実施しています。リーフレタスやコマツナの栽培の他、今年は新しい植物の栽培にも挑戦しました。



杉山 けいさん (33)
クラゲ・魚類の飼育や企画の製作・実行を務める。入社10年目。自分にとってサステナとは「みんなで一致団結して取り組むべき義務」



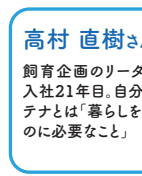
動物たちが出したフンでつくった堆肥を使って、芋や小松菜などの野菜を育てる。それをまた動物たちの餌にすることで、エコな循環を生み出しました。



長谷川 珠美さん (34)
バードエリアの飼育業務に務める。入社11年目。自分にとってサステナとは「動物や環境を守るために必要なこと」



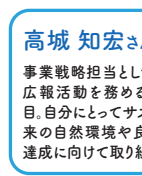
種の保存の一環として昨年誕生した新エリア「リトルライフ」では、当館で生まれた生きものたちを展示。稚魚やクラゲの成長過程などをみることができます。



高村 直樹さん (47)
飼育企画のリーダーを務める。入社21年目。自分にとってサステナとは「暮らしを維持していくのに必要なこと」



使われなくなった遊具を再利用。昨年取り壊した観覧車のキャabinを花壇の休憩所の一部として使用。これまでの楽しい思い出を残しつつ、これからの新しい思い出の1ページとなるようフォトスポットとして使用しています。



高城 知宏さん (42)
事業戦略担当として企画および広報活動を務める。入社20年目。自分にとってサステナとは「未来の自然環境や良質な社会の達成に向けて取り組むべきこと」